



キャサリン・グラハム夫人—アメリカの高級紙ワシントン・ポストの社主、社長として一九九一年まで二十八年間君臨した女史はニューズウィーク誌やテレビ局も所有する「超大物」です。

その自伝『わが人生』（小野善邦訳、TBSブリタニカ）の出版記念会のため来日した彼女にお目にかかりました。

その品の良い姿は、とても八十歳とは思えません。ちょうどマーガレット・サッチャー元英国首相とイメージが重なります。

この席で、私は岩倉使節団に同行しアメリカに渡り、ワシントンで成長した津田梅ら五人の日本人の少女のことを紹介しました。

日本女性の活躍の原点がワシントンにあった事実、彼女の興味を引いたように、資料を送ることを約束しました。既に米国で五十万部近く売れている自伝によると、彼女の父方はフランスのアルザス・ロレーヌ地方に何世代も続いたユダヤ系家族、母方は北ドイツのハノーバーのルター派の聖職者の家系。いずれ

も何らかの困難な事情で故国を捨て新世帯アメリカに渡ったわけです。

そして、ある時、その末裔の男女、即ち彼女の両親がニューヨークの画廊、それも日本の浮世絵の展覧会で出会ったというのが、七百近い大冊の書き出しで、たちまち魅入られます。

「訳者あとがき」に述べられているように、この本には三つの柱があります。まず「あるアメリカ人女性の波瀾万丈の

え、一挙に読んでしまうのは、もったいなく、一週間かけて精読しました。

全編を通じて最も感じるのは彼女のフェミニンな（女性らしい）実像です。夫の自殺により、思いもかけず父と夫の「会社」を経営することになり、初経験のこどばかりの戸惑い。さまざまな決断場面にあつて「これで良いのだろうか」という不安な自問自答が二十余年の過程のそこかしこに出ています。そこに私は実に

## ママの呼称が似合う女性

正直な人間性を見ます。

女性運動についても、

彼女の真骨頂は「最も重要なのは『男女の平等』という主張ではなく、女

物語」——うまくいっていると信じていた結婚生活が夫の躁鬱病、不倫、銃による自殺という悲劇で終わったこと。そしてペ

ンタゴン機密文書事件、ウォーターゲート事件などワシントン・ポスト紙を通じて見た「アメリカ・ジャーナリズムの在り方」。さらに、完璧な男性優越社会にあつて経験した「女性解放・女性差別撤廃への過程」。

いずれも示唆に富み、静かな興奮を覚

性には自分に適したライフスタイルを選ぶ権利がある」というところです。

夫に仕え、家庭を守るのが女の役目と信じてきた彼女が、急に男性優越社会に入り、戸惑った内面が一貫して映し出されています。急に「鉄の女」というイメージが瓦解し、人間味溢れる姿になります。それは、本人も気に入っているという「ママ（母上）」という呼称のイメージです。（浜地道雄IIバベル取締役）